

学童期における生活形成主体の育成  
 - 学童保育実践の分析をとおして -  
 静岡大教育 金令木美和, 静岡大教育 金日利子

目的: 今日の子どもたちは、受け身的で生活を形成していく主体になっていないのではないと言われて久しい。そういう中でも、学童保育は、子どもたちは毎日自発的なあそびを中心に、放課後の生活を自ら作り出している貴重な場であると思われる。ここでは、生活形成の主体を育成する上で、学童期における“あそび”に着眼する。あそびのもっとも大きな発達の意義は、「民主的選択主体の感性的土壌をつくり出す」(河崎)ところにある。あそびの過程においては、達成と逸脱、成功と失敗、拘束と自由との間の「揺れ動き」が保障されるからである。ここでは、主導的活動が“学習”に移行した学童期においても、生活の中に上記のような意味をもつ“あそび”を位置付けていくことが、生活全体の形成主体の育成に有効なのではないかととらえ、学童保育では、先の「揺れ動き」を認め保障する大人と子どもの関係と、その「揺れ動き」に共鳴したり対立したりしてあそびのおもしろさを高める仲間関係の二つが保障されやすく、あそびをとおして生活の形成主体の育成の基本が見られるのではないかと仮説し実践分析を通して検証する。

方法: 静岡市内の学童保育所Nクラブを主な観察対象とし、2ヵ月間のVTR観察を中心にとらえた資料をもとにエピソード分析をおこなう。

結果: 学童保育ではそれ以外の小学生の放課後に比して、あそびを決定していく場面、進めていく場面に「揺れ動き」つつも個々人が主体的に参加しあそびを継続させていく様子が観察された。学童保育にあるような関係をすべての子どもに保障していくためにも、「揺れ動き」を保障するあそびの指導論、およびあそびから発展して生活全体の形成主体の育成への理論化が今後の課題として残された。